



NO. 327

2020. 9. 15

社会福祉法人 大阪市手をつなぐ育成会

大阪市天王寺区東高津町12-10

大阪市立社会福祉センターB1F

発行責任者 小泉 いと子

TEL 06(6765)5621 FAX 06(6765)5623

http://city-osaka-ikuseikai.or.jp

定価 10円

大阪市手をつなぐ育成会 法人理念

障がいのある人が 安心して 心豊かに すごせるように

日々の積み重ねが大切！少しずつ準備を進めて
不安を解消していきましょう！

理事長 小泉 いと子

日頃は育成会活動にご支援頂きましてありがとうございます。

コロナ禍の中やっと9月の支部連絡会を開催することができ、皆様方の顔を拝見出来たことを、とても嬉しく思います。

この半年の間、お一人お一人それぞれが色々な経験をされ、想いを巡らされたことと思います。

3密を避けるため、外出や行事、外食など自粛要請が続く中、家族と一緒に過ごす時間も多くなり、日々の生活に不安を感じられている方もおられることと思います。

「不安を解消出来るように、サービス内容を見直す必要があるのでは…」そんな気持ちの募る中、毎日新聞に掲載されていた日本ケアラー連盟の児玉 真美代表理事の記事にふれ、非常に共感しましたので、一部をご紹介させていただきます。

コロナ禍による事業所の閉鎖やサービス縮小によって、多くの家庭が支援のない状態で放置されました。報道は医療・介護崩壊について取り上げますが、親が子どもを介護するケースにはなかなか目が向けられません。障がい者と家族は社会の周縁に置かれていると改めて感じました。

コロナ禍による医療資源の不足を受け、治療の優先順位を決めるというトリアージの議論も起きました。

「この事態なら命の選別が起こっても仕方ない」という方向性が作られつつある怖さを感じます。トリアージの議論は、障がい者が殺傷された津久井やまゆり園事件を思い起こさせます。それまでひそひそとささやかれていた「障がい者なんて生きていても仕方ない」

という声を、あの事件はとんでもない形で表面化させました。トリアージの議論も同じです。医療の分配をめぐる議論は、それまでも生命倫理学の議論としてはじわじわと広がりを見せていましたが、コロナ禍によって思いがけない形で社会の表層に飛び出してきた。そして、出てくるなり国民的なコンセンサス(合意)を得そうなことに不気味さを感じます。

私たち障がい児の親がずっと言われてきたのが、「お母さんだからやって当たり前」という言葉です。世間の人には「明るくがんばってえらいね」と言う。自分でも障がいのある子を産んだ罪悪感があるし、自分の中にも「母性神話」がある。だから「しんどい」と言えず、「大丈夫」と言ってしまふ。母親たちは世間の善意の言葉をじわじわと内面化していき、己を捨ててもがんばるという構図にはめられていくし、自分からはまっぴいってしまふ。でも私たち母親だって本当はしんどい、一人の人間だと言いたいのです。こうした母親依存をどうにかしてほしい。コロナ禍であぶり出された社会の意思とは結局、障がいのある人のケアは、家族と地域の事業所でなんとかしなさいということ。国が行っている政策は、「支援なき地域の中で、障がい者が棄民にされている」と見えます。

障がいのある人のニーズは多様です。年齢・家庭環境・障がいの種類や重さにかかわらず、どんな人でも安心安全に暮らせる受け皿が必要です。理想は障がいがあっても成人したら家族から自立して地域で暮らせること。それが、公的な責任で保障されてこそ、家族依存から脱却して、当事者も家族もその人らしく暮らすことができるのです。

同じ親の立場ということで、共感できる内容でした。コロナ禍の中、家族・支援者が当事者とどう向き合うのか、万が一に備え、どのような準備が必要か。